



日本女子大学
成瀬記念館



時の庭

槇島みどり 高橋美保

シリーズ“創る”(8)

庭を創る・庭を撮る — 榎島みどり・高橋美保 二人展

2017年1月17日(火) — 3月4日(土)

「時の庭」－泉フロートガーデン－

目白キャンパスの東南の角、成瀬記念講堂を見下ろす百年館低層棟の屋上に「時の庭」があります。創立百周年記念事業として建設された百年館は高層棟と低層棟からなり、高層棟は2001年5月、低層棟は2003年6月に竣工、10月に落成式が行われました。環境への配慮から低層棟の屋上を緑化する計画は当初からありましたが、その当時、屋上緑化はまだ一般的ではなく、全面芝貼り等の案もあるなか、本学家政学部家政理学科Ⅱ部（生物農芸専攻）卒業の槇島みどりさんは、「時の庭」と題した屋上庭園を設計、自ら植栽にも携わりました。この庭園は第4回屋上・壁面・特殊緑化技術コンクールで都市緑化技術開発機構理事長賞を受賞しています（2005年）。

南北約50メートル、東西約10メートルの細長い屋上空間は4つのエリアに分けられ、それぞれのコンセプトに添って植栽や構造物が配されています。東にはカテドラルの尖塔や遠くスカイツリーを望み、はるか西には富士山、そして南には早稲田から続く市街地が見渡せます。

「時の庭」は刻々と変化する光や風、季節ごとの葉色や花のうつろい、そして完成から十余年を経て大きく育ち、また移り変わって行く植生をも意味しています。

庭園の入り口に掲げられた銘板には、キャンパスに憩いの場を提供したいという旧制46回生（如月会）の発議により、泉会（大学PTA）をはじめ多くの方々のご芳志を得てこの庭園が誕生したこと、また名称を学生から募集し、「泉フロートガーデン」と命名したことが記されています。

C O N T E N T S

第I部 庭を創る

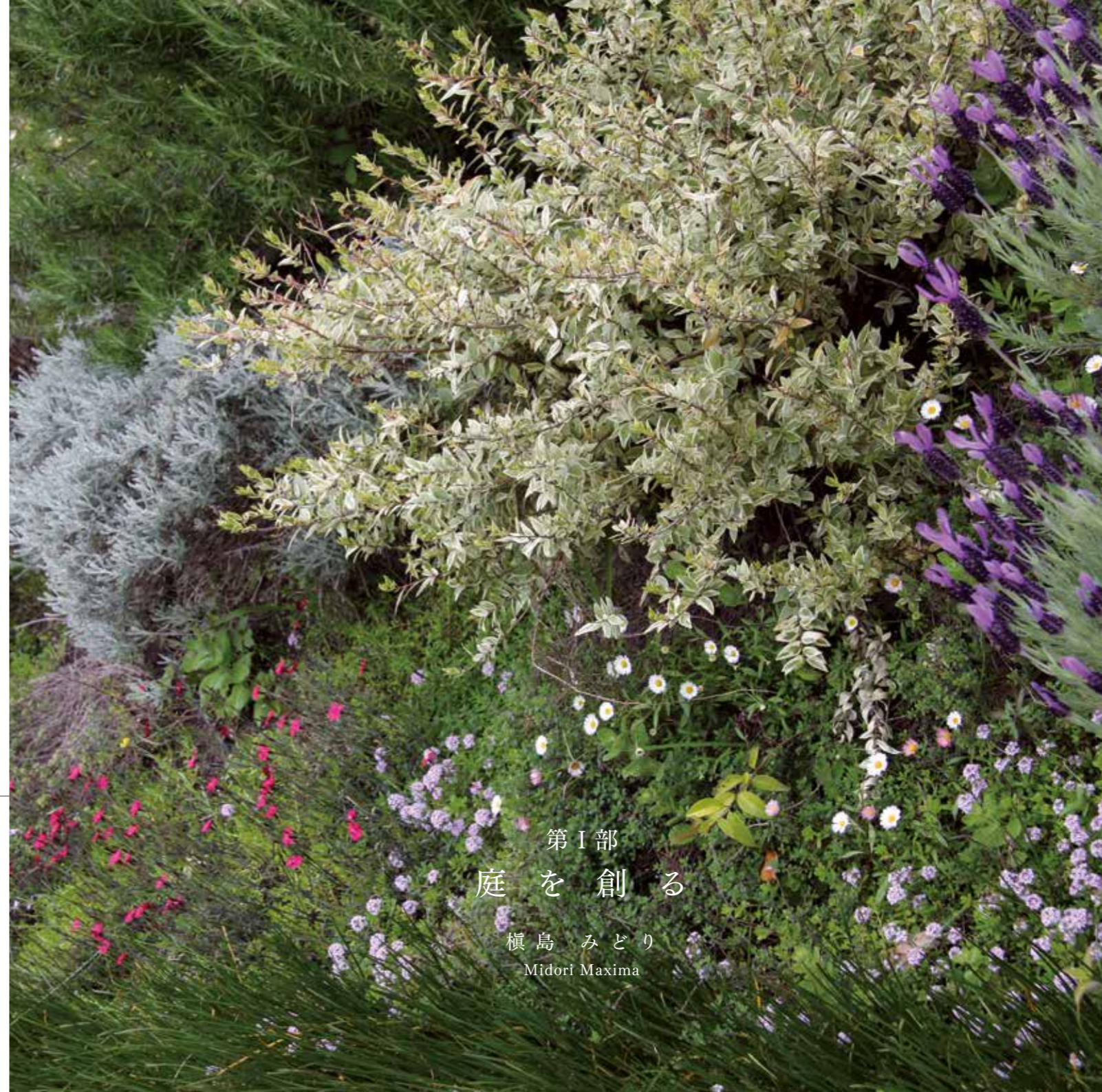
榎島 みどり Midori Maxima 005-024

第II部 庭を撮る

高橋 美保 Miho Takahashi 025-045

Flowers 花たち

046-047



第I部
庭を創る

榎島 みどり
Midori Maxima



横島 みどり
Midori Maxima

日本女子大学家政学部
家政理学科Ⅱ（生物農芸専攻）新25回卒
学術博士（千葉大学大学院園芸学専攻）

東京農業大学客員教授
景観デザイナー／園芸療法士
日本大学生物資源科学部 講師
日本女子大学生涯学習センター 講師

色彩や香など五感刺激を活かした造園、空間計画を得意とする。ハーブや植物療法の先駆者。身近な園芸から公共施設まで、心地よい空間づくりを幅広く実践している。

<主な著書>
『ハーブで美しくなる』『ハーブ図鑑110』
『ボタニカルアートの世界』『楽しいハーブ入門』
『はじめての庭づくり』ほか

<主な作品（基本設計を含む）>
お台場地区ウォーターフロント／上野動物園 ゴリラ・トラの住む森／国際総合展示場（東京ビッグサイト）／レストランテ・ジャルディーノ（台東区まちかど景観コンクール 建築景観賞、1993年）／キッズパーク／キッズステージ（共に川越市、住宅産業開発協会年間優秀事業賞、1994-95年）／ホワイトガーデン「花の公園」／山陽道権現湖PA／国営えちご丘陵公園「暖の館」／イングリッシュガーデン／チュニジア大使公邸／多摩川アートラインプロジェクト（グッドデザイン賞・メセナ大賞、2008・2009年）

屋上庭園 時の庭によせて

「泉フロートガーデン」を『時の庭』と、私は名付けていました

四季折々・その時々光と風がデザインを変化させる庭

そこではヒトも植物も「美しい時」を共有する

訪れる人達が穏やかな時を過ごし

光や風や香りを感じながらリラックスしリフレッシュしてほしい

座り、佇み、ゆっくり歩く時

風や陽ざしや季節が移り変わる時

植物たちのざわめきや煌めきに気付かされる時、があるはず

それこそが「時の庭の景」

折々時々生まれ変わる植物たちの表情に囲まれて

＝時の庭の饗宴＝をお楽しみいただければ幸いです



屋上庭園の成り立ち

<経緯>

日本女子大学の創立百周年を記念して高層と低層の新しい二棟が成瀬講堂と隣接して建設されることを知ったのは17年前のこと。そしてその屋上を緑化する案が浮上していると…。

時代はちょうど温暖化対策のための屋上緑化へと風が吹き始めていた。母校もまたその気配や大切さをいち早く感じていたのかもしれない。ただ、その緑化をどのようにデザインするかは決まっておらず、数基の大型コンテナに植物を植えこむ程度のものであったらしい。

建築設計を担当なさった山下和正先生にお会いする機会があり、やはり屋上のデザインは無いことを知る。後に山下先生の後押しもあって屋上庭園のデザインに携わり、技術と労働力を提供することになった。



<目的>

屋上緑化するのではなく、緑に囲まれた屋上庭園を造りたい。そのためのキーワードは「光・風・香」、「歩・佇・座」とし、訪れる人達の何か感性刺激につながるような「穏やかで明るい癒しの庭」を計画の目的とした。

スタイルは日本女子大学の建学性になぞらえようと、多様な植物の多面的な機能を各学部の特性と照らして、その連携をデザインに活かすことにした。

たとえば、家政学部ではハーブ・エディブルフラワー・染色・薬用などの日常に関わる植物、人間社会学部の場合はセンサーガーデン・レイズドベッド・園芸セラピーの事例との関連、文学部ではシェイクスピア物語・ギリシャ ローマ神話・源氏物語・枕草子等に登場する植物を。そして、共生・多様性・循環に関連する植物たちが理学部と結びつくことを期待しながら植栽計画を行った。

古来、私たちの身近に育ち日々の暮らしのあらゆる役に立ってきた植物たちを中心に、飲食、医薬、美容、防腐、消毒、染色、クラフト、アロマセラピー等に活用されてきた植物を選ぶことで、文化や歴史を振り返りながらこの庭を使いこなして欲しいという願いを織り込んだ。

<屋上庭園の形式>

長方形のスペース約550㎡を4つのエリアに分け、野趣と整形を交互に配した。

屋上に上がってすぐ目の前に広がる線形は日本の海岸線に特徴的なリアス式の出入りを取り入れた法面。ここは、植物たちが風とささやき交わしているような「野原のエリア」。続く「語らいの場」には、豊穡の象徴樹オレンジを囲む台形のベンチと、長椅子をセットした2基のパーゴラを設けた。自由なお喋りがはずむファニチャー主体の場である。

木製園路で囲まれた「ひなたぼっこのエリア」は六角形の広がり。対面に座る互いの視線を和らげるために瓢箪型に盛土した。四隅の高木類や周囲の生垣のためには、別枠の基盤を設けて土量を補っている。

ゲイトの奥は生垣に囲まれる正方形のオアシス「想いの場」。ここは市松柄をモジュールに格式を表現。避雷針を備えたガゼボを設けたが、傾けた軸線やコーナーの水鉢、植物選びによって和の静けさを求めたスペースである。



<構成>

単調になりがちな長方形の屋上に対して、構造物・園路・生垣等によって「開く」「閉じる」「囲む」ことで視線の移動と誘導を促し、限られた空間に変化を与えた。園路はエリア区分を兼ね、校舎の中心軸に対して60度、30度、45度の角度をとって各々の雰囲気の違いを区別している。

その他の木製の構造物(パーゴラ、ガゼボ、フェンス、ゲイト等)も景を分けつつガーデンを際立たせる要素だが、「用の美」を兼ね備えるように形状寸法を工夫した。5基のレイズドベッド(立ち上がり花壇)は園芸療法的な立場だけでなく、景の仕切りや立体化のための要素でもある。

ピラミッド形のガゼボのある目白通り側は、当初、瞑想の場を思い浮かべていた。そのためエリア全体を生垣で囲み、一部低くした植え込みの間から旧細川邸や椿山荘などの近隣の連携した緑が臨めるような演出を試みていたのだが、残念ながら現在は植栽が変更されている。

<植物選び>

それぞれの植物の個性が際立つよう、また、魅力を多く引き出せるように「配植」した。

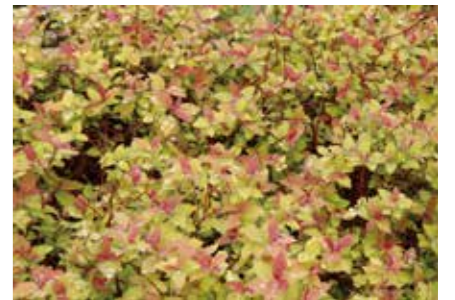
このハイショクはハーモニーを作り出す正に「配色」でもあり、「綺麗でしょう!」「精緻なデザインの私に気付いて!」と、自慢の声が聞こえてくるほどに植物たちを活かしたいと思っていた。そしてもうひとつは、いつも主眼に置いている、光と風と雫をデザインするのにふさわしい表情を備えたものを使うことだった。

私には植物好きを増やしたい目論見もあって、選定にあたっては、形状やテクスチャが特徴的で、季節とともに葉色が美しく変化し、芳香がある、等の個性に叶うことが必要だった。また、当時珍しかった草本類や木本類の新品種も多用している。五感刺激に関わる植物選びを中心に行ったことになる。

宿根性のハーブ類の多くは葉色の変化とともに香りや触り心地を楽しめる。芽吹きから冬越しまで葉色を変化させ続ける低木類も魅力が多い。秋の紅葉に果実の際立つ色味が加わり、次々に新鮮な様相が展開する。それは新春まで続く。

動きと高さの補いは、個性的な登攀性ツル植物の葉と花が担う。鮮やかでありつつ洗練されたカラーハーモニーや色相対比を試みたこの庭で、静かな時間を過ごせるように、また、訪れるたびに驚きや発見があるようにと、感性の刺激を意図して計画した。

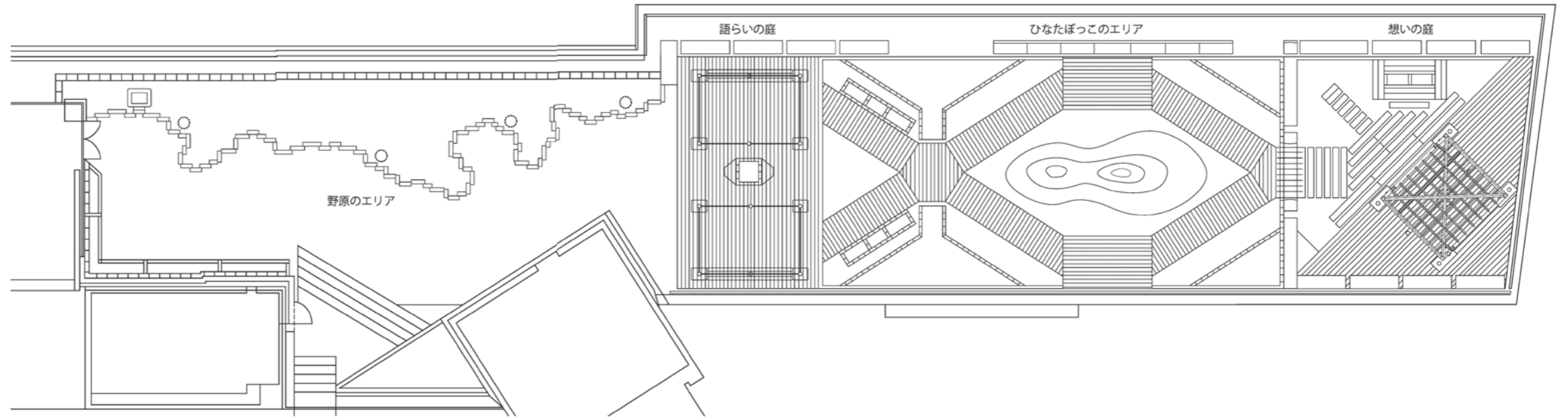
花たちについては、色彩の心理も踏まえつつ、可憐な小花の静かな彩りを基本に、大きな花を咲かせるものは白色を中心に選定した。





Design Drawing

日本女子大学 屋上庭園 時の庭
設計：横島みどり





春爛漫



U La La



行ってみようかしら



La La La

あなたと隣に



足音の先に



風のささやき



Fusion



見て・みて・観て

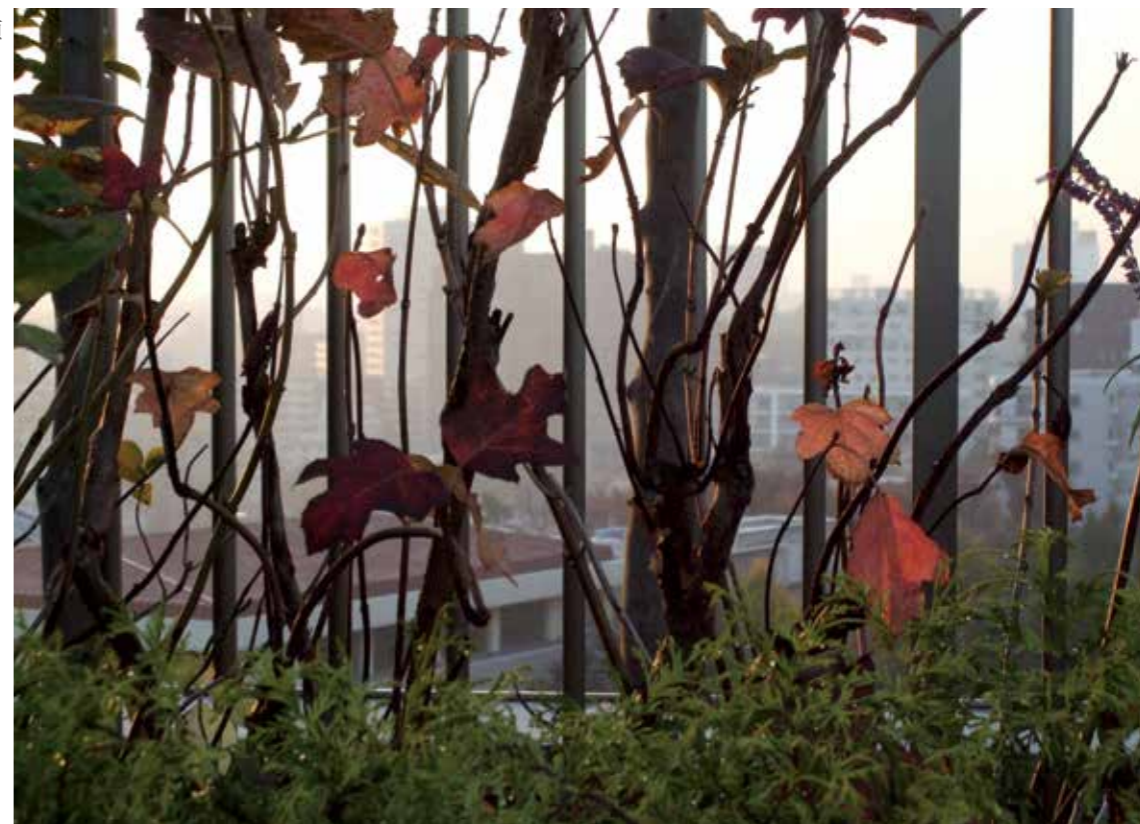


Pianissimo



陽の戯れ 妖精たち出てきていいよ

立待月の頃



Composition





秋粧う



第Ⅱ部
庭を撮る

高橋 美保
Miho Takahashi



高橋 美保
Miho Takahashi

日本女子大学文学部英文学科 新10回卒
東京大学大学院経済学研究科応用経済専攻
博士課程満期修了退学

日本リアリズム写真集団 (JRP) 会員

1970年 日本女子大学家政学部家政経済学科非
～2006年 常勤講師

現在まで、複数の大学、カルチャーセ
ンター、企業などの講座講師を勤める

1998年～ 写真家大橋治三氏(二科会会員)の写真
教室に入り写真を学ぶ

2011年～ 現代写真研究所尾辻ゼミ在学

2011年12月 「女性三人写真展」(東京交通会館)開催

2014年4月 潮田展子・高橋美保写真展「台北・ダイ
バーシティ」(アイデムフォトギャラ
リー「シリウス」)を開催

植物が語るとき

花を撮るとき、写真の師、大橋治三先生の言葉を思い出します。十数年前、写真を見ていただく度に、「アカン」の一言だけ・・・ある日、珍しく私の写真に「これはいいよ。花がしゃべっとる」と言われました。今でもその意味を考えます。

「時の庭」は設計、植栽、管理の三つがそろったイングリッシュガーデンですが、私たちが小さい頃から見慣れた野山の植物の姿が数多くあります。最初訪れたのは4年ほど前ですが、一巡して「もう少し手入れがよければなあ」と思っただけでした。でもその後、行くたびにありふれた草花の姿に新しい発見があり、庭園の魅力が増してきました。

水を渴望して白いうぶ毛を光らせ風にそよぐボリジ、虫の到来を待ち奇抜な工夫を凝らすシモツケの花、風雨にあおられてちぎれそうになる蔓性植物、全方向に揺れて室内楽を奏でるようにきらめくグラスたち、光を受けた瞬間、色を濃くするナデシコ、早春の光に恥じらうように花芯をのぞかせるクレマチスの蕾。虫たちは蜜を吸うのに忙しく、鳥たちは羽を休めて水を飲んだり、新鮮な羽の模様をしたスズメの子が足元に寄って来たりします。

「時の庭」の植物たちの言葉は未だに理解できませんが、すこしでも植物の語りたいことを捉えて写真を写していきたいと思います。



アサギリソウ



エンゼルヘア
アスパラガス



シモツケゴールドフレーム



ルリチシャ



チガヤ



エニシダ



ワレモコウ



ハゴロモジャスミン



シレネガリカ



コットンラベンダーとルブス



コスモス



ススキと小判草



サントリーナたち



チューリップとファイリヨモギ



ギボウシ



リアス式海岸



春の嵐

Flowers

花たち



サクラ・カエデ(桜楓)



ギョリュウバイ



シモツケゴールドフレーム



ナツユキカズラ



ハゴロモジャスミン



カロライナジャスミン



ツキユキニンドウ



ドウダンツツジ



オオデマリ



エニシダ



システナ (白)



カシワバアジサイ



ブツレア



ナadeshiko



アネモネ



カレーブランツ



イソギク



スイセン



フレンチラベンダー



イングリッシュラベンダー



ローズマリー



シルバースージ



フィリフェラオーレア



ワレモコウ



オミネシ



スイフヨウ



カレックス・プキヤナニー



コバンソウ



ルリチシャ



ギボウシ/ジギタリス



エキナセア



タイム



シルバースントリーナ



パニカムチョコラータ



カルーナ



ツルニチニチソウ



エリゲロン



アサギリソウ



ガウラ (白)



ツルバラ・カクテル



クレマチスアーマンディー



ベニバナトキワマンサク



ハツユキカズラ



リシマキア・リッシー



コクリュウ



ホタルブクロ



ヒューケラ



タマスダレ

時の庭

シリーズ“創る”（8）

庭を創る・庭を撮る― 槇島みどり・高橋美保二人展図録

2017年1月17日発行

編集 日本女子大学成瀬記念館

撮影 槇島みどり／高橋美保

発行 日本女子大学成瀬記念館 ©2017
〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
TEL 03-5981-3376

制作 恵雅堂出版株式会社
〒162-0053 東京都新宿区原町1-28
TEL 03-3203-4754

禁 無断転載